◇若き血に燃ゆる者（九卷 二六米）

帝キネ　現代映畫

原作者　川口松太郎
脚色並監督者　木村惠吾
撮影者　中山良夫
主演者　中野英治　德川良子　杉狂兒

第三百七十號

紹介

これは題名から想像するやうな近代的な、スポーツ的なものではなく、ありきたりな三角戀愛と使ひ古された友情との交錯したドラマがゝつた低調なものである。それもまあいとして、折角注目した木村惠吾は脚色に監督に歷然たる自己陶酔に陷つてゐるのである。同一手法の繰り返し、くど過ぎるユーモアの連續、頻出するタイトルへの頼り過ぎ等、幾多重大なる箇所に未熟さを曝露してゐる。それのみならず彼には新鮮なカレッヂ・ライフものに對する心得がないらしい。この根本的な問題が結局この映畫を頗る曖昧模糊たる裡に終らしてしまつたのである。せめて良い箇所を擧げるなれば、トップシーンからそれもせいぜい一卷目位までの所のテムポで、これで進行したら今少し目鼻立ちがさゝのつたであらう。然しこの僅かな部分に於てもキャメラは惡く黑ずんで死んでゐる。快朗性を最も必要とする種類にある映畫だけにこれは全く大打擊である。甚だお粗末ながら挿入されてある前後二回の野球試合はトリックと編輯のお手際が見え透いてゐて、せつかくの東京ロケーションもとんと効果がない。中野英治はくら替第一回作品だけに相當な熱を吐いて、一臂の力を與へてゐるが、芝居上手な杉狂兒の巧さは、此の一篇の最大な生彩である。德川良子は若さだけで存在は薄い。——池田　重近——

興行價値——中野英治にして、此の題名、それに相當宣傳も利いてゐるから安全性は充分である。（七月八日　常盤座）